

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：17501  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2011～2012  
 課題番号：23730619  
 研究課題名（和文） 「教育実習」と「体験的プログラム」における学生の学習過程の分析  
 研究課題名（英文） Learning process in “practice teaching” and “school internship”

### 研究代表者

森下 覚 (MORISHITA SATORU)  
 大分大学・教育福祉科学部・助教  
 研究者番号：60595320

研究成果の概要（和文）：本研究は、教員養成系大学で行われている「教育実習」と「体験的プログラム」における学習過程を比較することを目的として行われた。研究の結果、教育実習は失敗を伴う実践的な体験が少なく、指導力の自己認知が高まることが明らかになった。一方、体験的プログラムは現場の教師と協同して働く実践的な機会が多く、学生は教師の背中を見て学ぶことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to compare learning process in “practice teaching” with that in “school internship”. The results were as follows: (1) There were few practical experience associated with failures in practice teaching. Therefore, student teachers in practice teaching have highly evaluated educational skills of themselves. (2) There were many practical experiences collaborating with class teachers in school internship. Therefore, students have learned by watching their behaviors.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育実習，体験的プログラム，学習

### 1. 研究開始当初の背景

「教育実習」は、教育職員免許法に基づき教員免許状を取得しようとする者が、学校教育の現場で教育実践を体験・学習するための活動である。教育実習の体験には、「教員志望動機を高めること」、「教師効力感を高めること」、「教職・児童・授業に対するポジティブなイメージ形成を促進すること」等の効果があることが知られている。

一方、「体験的プログラム」は、各教員養成系大学が「教育実習」とは別に、教員の資質・能力向上のために用意している特色ある活動である。例えば、大分大学教育福祉科学部では、地域の教育委員会と連携し、学校現場からの支援要請に応える形で、地域の小・

中学校に学生を派遣し、授業補助や個々の子どもの学習を支援する「まなびんぐサポート」活動を実施している。「体験的プログラム」では、多様な困難を抱える児童に対応する教育実践力が育まれることが知られている。

しかし、多くの大学の教員養成カリキュラムにおいて「教育実習」と「体験的プログラム」が並列しているにも関わらず、相互の学習過程の比較検討は未だ十分になされていない。こうした先行研究の状況を踏まえて、本研究は「教育実習」と「体験的プログラム」の学習過程を比較することを目的とした。

## 2. 研究の目的

(1)教師体験尺度と指導力自己認知尺度の作成：教育実習と体験的プログラムにおける学生の体験を測定するための教師体験尺度を作成する。また、学生の指導力の認識について測定する為の指導力自己認知尺度を作成する。

(2)教育実習と体験的プログラムの体験内容の比較：教育実習と体験的プログラムにおいて、学生が体験していた内容と程度を測定し、その体験内容の違いを比較する。

(3)体験内容が指導力の認知に与える影響についての検討：(2)で明らかになった体験内容と程度が、学生の指導力の認知にどのような影響を与えているのかについて検討する。

## 3. 研究の方法

(1)調査対象者：調査対象者は、A大学の教員養成課程に所属し、教育実習に参加した学生198名(全て学部3年)と体験的プログラムに参加した学生68名(学部2年20名、学部3年29名、学部4年14名、院生5名)であった。教育実習と体験的プログラムに重複して参加している学生は対象者から削除した。

(2)調査項目：教職志向性、教師体験、指導力の自己認知について、以下の通り調査した。

教職志向性：学生の教育実習(体験的プログラム)前後の教職を志向する程度を、4択(「ぜひ教職につきたい」「できれば教職につきたい」「教職以外の進路を希望している」「わからない」)で測定した。

教師体験：Lave & Wenger(1991)や春原(2008)を参考にし、「授業での成功と被賞賛体験(6項目)」、「実習生参考体験(5項目)」、「教員参考体験(4項目)」、「子どもとの親和体験(5項目)」、「不満体験(3項目)」、「価値観の共有体験(6項目)」、「教師への憧れ体験(6項目)」、「教師の周辺的な仕事への従事(5項目)」、「水平的な越境体験(5項目)」を作成した。各項目に対して、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の5件法で回答を求めた。

指導力の自己認知：藤田ら(2009)、森下ら(2012)を参考にし、「教師としての基本的な資質(10項目)」、「児童理解と対応(10項目)」、「授業への取り組み(13項目)」を作成した。各項目に対して、「1：当てはまらない、2：あまり当てはまらない、3：どちらでもない、4：やや当てはまる、5：当てはまる」の5件法で回答を求めた。

## (3)調査手続き

教育実習参加者に対する調査は、2011年10月と2012年10月に、教育実習の事後指導の時間を使用して、調査を実施した。また、体験的プログラムに対する調査は、2012年2月と2013年2月に、体験的プログラムの専用HPにおいて、調査を実施した。

## 4. 研究成果

教育実習前の学生の教職志向は、「ぜひ教職につきたい」が64名、「できれば教職につきたい」が72名、「教職以外の進路を希望している」が37名、「わからない」が25名であった。教育実習後の教職志向は、「ぜひ教職につきたい」が92名、「できれば教職につきたい」が47名、「教職以外の進路を希望している」が38名、「わからない」が21名であった。教育実習を経て、「できれば教職につきたい」と考えていた学生が「ぜひ教職につきたい」と考えるようになっていた。これは、教育実習の体験が教職志向を高めるという先行研究の結果を支持するものであった。

体験的プログラムに参加する前の学生の教職志向は、「ぜひ教職につきたい」が46名、「できれば教職につきたい」が19名、「教職以外の進路を希望している」が3名、「わからない」が0名であった。体験的プログラムに参加した後の学生の教職志向は、「ぜひ教職につきたい」が49名、「できれば教職につきたい」が15名、「教職以外の進路を希望している」が3名、「わからない」が1名であった。体験的プログラムの前後で、学生の教職志向に大きな変化は見られなかった。これは、体験的プログラムに参加する多くの学生がはじめから教職志向が高く、体験後もそれが維持されていたと考えられる。

(1)教師体験尺度と指導力自己認知尺度の作成：まず、教師体験について問う45項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行い、4因子を抽出した。第1因子は「実習先の教師のように児童のことを理解出来るようになりたいと思った」、「実習先の教師の様に児童たちと信頼関係が取れるようになりたいと思った」など14項目からなる。これらの項目は現場の教師の指導や教育観に対して憧れを抱いた体験を示す項目であると考えられる。よって、第1因子を「羨望体験」因子と命名した。第2因子は「他の実習生が子ども達から慕われているのを見た」、「他の実習生の言動に教えられた」など8項目からなる。これらの項目は、他者を参考にし、自らの実践を改善する体験を示す項目であると考えられる。よって、第2因子を「他者参考体験」因子と命名した。第3因子は「子ども達の中にとけ込めた」、「子ども達とコミュニケーションをとることが出来た」など5

項目からなる。これらの項目は、子ども達との親和体験を示す項目であると考えられる。よって、第3因子を「児童生徒親和体験」因子と命名した。第4因子は「うまく授業をすることができた」、「指導教諭からよい評価を受けた」など5項目からなる。これらの項目は、学生の成功体験を示す項目であると考えられる。よって、第4因子は「成功体験」因子と命名した。

次に、指導力の自己認知について問う33項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行い、4因子を抽出した。第1因子は「準備した教材や教具を授業で有効に使用することができる」、「1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる」など11項目からなる。これらの項目は、学生の授業実践力の認知に関する項目であると考えられる。よって、第1因子は「授業実践力」因子と命名した。第2因子は「子どもに対して、受容的・共感的に対応することができる」、「子どもの人権を尊重することができる」など8項目からなる。これらの項目は、子ども達に対する学生の教育的な振る舞いを示す項目であると考えられる。よって、第2因子を「教育的な振る舞い」因子と命名した。第3因子は「教師としての使命感を持っている」、「子どもの能力を伸ばす教師の仕事に情熱を持っている」など6項目からなる。これらの項目は、学生の教師としての資質を示す項目であると考えられる。よって、第3因子は「教師としての資質」因子と命名した。第4因子は「非行や子どもの問題行動に対し、その背景等について理解している」、「子どもの背景にある家庭環境や生育歴から子どもを理解することができる」など5項目からなる。これらの項目は、学生の教育についての知識を示す項目であると考えられる。よって、第4因子は「教育の知識」因子と命名した。

(2)教育実習と体験的プログラムの体験内容の比較：体験内容の比較を行うために、教育実習と体験的プログラム毎に、(1)で作成した「羨望体験」因子、「他者参考体験」因子、「児童生徒親和体験」因子、「成功体験」因子それぞれの下位尺度得点(項目の平均値)を算出した。そして、下位尺度得点について1要因の分散分析を行った。その結果、「他者参考体験( $F(1, 265)=556.41, p < .01$ )」は、体験的プログラムよりも教育実習の方が多くことが示された。そして、「児童生徒親和体験( $F(1, 265)=5.52, p < .05$ )」は、教育実習よりも体験的プログラムの方が多くことが示された。

教育実習は複数の実習生とともに参加するため他者参考体験が多くなり、一方、体験的プログラムは基本的に学生一人で活動することが多いため他者を参考にする機会が

少ないと考えられる。しかし、体験的プログラムは、継続的に長期間の活動を行うため、児童生徒との親和体験が教育実習よりも多いと考えられる。

(3)体験内容が指導力の認知に与える影響についての検討：体験内容(4因子)が学生の指導力の認知(4因子)に与える影響について検討するために、教育実習と体験的プログラム毎に重回帰分析を行った。

教育実習においては、「羨望体験」が「授業実践力」、「教育的な振る舞い」、「教師としての資質」、「教育の知識」の自己認知に正の影響を与えていた。「児童生徒親和体験」は「授業実践力」、「教育的な振る舞い」の自己認知に正の影響を与えていた。「成功体験」は、「授業実践力」、「教育的な振る舞い」、「教師としての資質」の自己認知に正の影響を与えていた。

体験的プログラムにおいては、「他者参考体験」が「教育的な振る舞い」の自己認知に正の影響を与えていた。

この結果は、体験的プログラムよりも教育実習の方が、学生の指導力の自己認知を高める傾向を示唆している。教育実習は、実習生に対して担当教員が必ず付き、実習中の活動について随時指導を受けることが可能である。また、教育実習の体験内容は、カリキュラムに沿って決められているため、事前の備えが可能である。そのため、教育実習に参加する学生は、十分な備えさえあれば、十全な教育活動を達成することが出来ると考えられる。

それに対して、体験的プログラムは、現場の教師と協同して、子ども達に対する教育活動を達成する必要があるため、現場の教師から随時指導を受けることが出来ない。また、体験的プログラムの体験内容は、実践性が高いため、事前の備えが可能ではない即興性の高い活動である。そのため、体験的プログラムに参加する学生は、自らの課題と直面する機会が多くなると考えられる。

以上の体験内容の違いが、学生の指導力の自己認知に与える影響の違いを生んでいると考えられる。

#### (4)本研究の成果のまとめ

本研究は、教育実習と体験的プログラムが学生に与える影響がそれぞれ異なることを明らかにした。

教育実習は学生に対する教育的配慮がなされているが、実践的な経験は体験的プログラムに比べて教育的配慮が少ない。そして、体験的プログラムは教育現場の中で教師と協同して活動する実践的な体験に恵まれている一方、学生に対する教育的配慮は教育実習に比べて少ない。

多くの教員養成系大学において、体験的プログラムは導入されているが、その支援体制は十分ではない。本研究の結果は、体験的プログラムにおける体験の実践性の高さを示す一方で、教育的配慮の少なさを示唆するものであった。つまり、単に学生を教育現場に入らせ、教育活動を体験させるだけでは、学生は自らの課題と直面するばかりで、それを解決する術を学ぶことは出来ない可能性が高い。今後、体験的プログラムを拡充して行くためには、学生への支援体制の整備が重要であると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 森下覚, 教育実習生の教職を「目指すプロセス」と「諦めるプロセス」, 日本教育心理学会第 54 回総会, 2012 年 11 月 23 日, 琉球大学千原キャンパス
- ② 森下覚, 「教育実習」と「体験的プログラム」における学生の体験内容の比較, 第 73 回九州心理学会, 2012 年 11 月 11 日, 鹿児島大学郡元キャンパス

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

森下覚 (MORISHITA SATORU)

大分大学・教育福祉科学部・助教

研究者番号：60595320

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし